

校長先生の初恋物語

第42話 なぞのハンバーグ

よしこさんの愛のハンバーグを食べることはできませんでしたが、そのことよりも、とっくんは、なぞのハンバーグのことをたしかめたくて、走って家に帰りました。

家に着くと、家の裏にあるお父さんの仕事場に行きました。とっくんの家は、自動車修理工場です。お父さんは仕事場で、車の修理をしています。仕事場には、汗と車の油で真っ黒になったお父さんが、仕事をしていました。そのお父さんに向かって、とっくんはおそろおそろたずねます。

「お父さん、今日のハンバーグはお父さんが作ったハンバーグでしょ。」

するとお父さんの仕事の手がぴたっと止まり、背中を向けたままでしたがこう言いました。

「どうして分かったんだ。」

とっくんは正直に言いました。

「だって……。形がくずれていて、こげてて、あまりにも、まずかったから……。」

お父さんは、ギロリとこっちをにらみつけました。とっくんはあわてて逃げました。でも逃げながら、お父さんに大きな声で言いました。

「お父さん、ハンバーグを作ってくれてありがとう。」

その日の夜、元気になったお母さんにきいてみました。

「ねえ、お父さんはどうしてハンバーグを作ることができたの。だって昨日はひき肉が買えなかったんでしょ。買い物には行けなかったんだよね。ひき肉はどうやって手に入れたの。」



お母さんが、教えてくれました。

夜中にとっくんが家の中に入った後、お父さんは、むくっと起き出してきて、お母さんにこう言ったそうです。

「お前がびょうきで作ることができないんだったら、おれが作る。としのりが楽しみにしているハンバーグを作るぞ。」

お母さんは止めたそうです。だって、夜中の2時です。お肉屋さんがあいてるはずがありません。でも、お父さんはお肉屋さんに行きました。当然、店は閉まっていたそうですが、閉まっていたシャッターをばんばんたたき続け、むりやり開けてもらい、ひき肉を買ってきたそうです。そして、家に帰ってからは、ハンバーグづくり。とっくんが目覚めるぎりぎりまで、必死になって、初めてのハンバーグを作っていたそうです。形はくずれて、黒こげで、味の無い、まずいハンバーグでしたが、お母さんからそのことをきいて、とっくんはうれしくなりました。

お父さんとは、あまり話をしたことがありません。怖かったし、仕事ばかりの人でした。このハンバーグのことがあってから数年後、お父さんは死んでしまって、思い出らしい思い出はハンバーグくらいです。ですから、今でも、ハンバーグを食べるたびに、お父さんを思い出します。小学5年生の時から、ずっとずっと、ハンバーグが一番好きな食べ物です。

次の日の学校帰り、お肉屋さんの前を通ったら、まだシャッターはぼこぼこにへこんだままでした。お肉屋さんのおじさんが、「とっくん、おかえりー。」と声をかけてくれました。とっくんは、ふかぶかとおじぎをして、「おじさんごめんなさい。」と言いました。

つづく
愛のハンバーグよりも、まずいハンバーグを選んでしまったとっくんは、このあと、よしこさんにきられてしまい、アマーラさんに続いて、よしこさんまでとっくんから離れていきます。

次回予告 さよならよしこさん



思い出すなら。